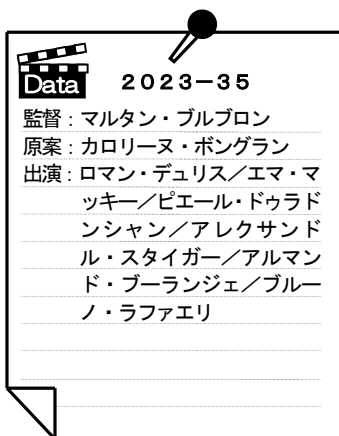




👁️👁️ みどころ

『エッフェル』というシンプルな原題を見れば、本作はエッフェル塔建設秘話！そう思ったが、『エッフェル塔 創造者の愛』とは一体ナニ？これは“史実を基に自由に作った物語”なればこそその邦題だ。

1970年の大阪万博は日本人の誇りだが、1889年のパリ万国博はそれ以上のパリ市民の誇り。そのモニュメントとしてコンペで決定したのが高さ300mの鉄塔を造る計画だが、なぜそれは東京タワーや通天閣そして京都タワーとは全く違うエッフェル塔と呼ばれているの？

なるほど、自由な発想と創造力をたくましくする作業は面白い。それを本作でしっかり確認しよう！

■□■本作はなぜ“史実を基に自由に作った物語”に？■□■

「Based on the true story」＝“史実に基づく物語”は多いが、本作はそれではなく、“史実を基に自由に作った物語”だ。また、本作の邦題は『エッフェル塔 創造者の愛』と説明調で長ったらしいが、原題はシンプルに『エッフェル』。1889年に開催されたパリ万国博覧会の最大の呼び物として建設された「エッフェル塔」は、なぜエッフェル塔と呼ばれているの？それはギュスターヴ・エッフェルが建設したからだ。そのため、本作の原題は『エッフェル』だが、その内容は“史実を基に自由に作った物語”とされているらしい。

世の中に“伝記モノ映画”は多いが、その場合、ドキュメンタリー映画になることもあれば、史実に基づく物語になることもある。しかし、『エッフェル』と題して、エッフェル塔を建造したギュスターヴ・エッフェルの伝記モノ映画を作るについて、“史実を基に自由に作った物語”としたのはなぜ？それは、なぜかエッフェル氏についての資料が極端に少ないためらしい。つまり、エッフェル塔建造にまつわるギュスターヴ・エッフェル氏の伝

記モノ映画を作ろうとすると、ドキュメンタリーは無理だし、“史実に基づく物語”もしんどいため、映画史上はじめて(?)“史実を基に自由に作った物語”として本作にチャレンジしたらしい。時あたかも、2023年のNHK大河ドラマとして『どうする家康』が放映されているが、これもハッキリ言って“史実を基に自由に作った物語”になっている。しかしそれは、本作とは逆に徳川家康についてはあまりにも膨大な資料が残っているため、逆にそれにとらわれず、自由な発想で新たな家康像の構築を狙ったためだ。なるほど、なるほど・・・。

■□■建築家・エッフェルvs 建築家・安藤忠雄■□■

建築家として有名な日本人には、丹下健三、黒川紀章、隈研吾、安藤忠雄等がいるが、一流大学卒のエリートではなく、叩き上げの建築家として有名なのが大阪出身の安藤忠雄。「住吉の長屋」から始まった彼の建築家としてのサクセス・ストーリーは、まさに日経新聞の「私の履歴書」にふさわしいものだが、安藤忠雄建築の特徴の一つは“コンクリートの打ちっ放し”にある。

本作の主人公たる建築家、エッフェルは謎が多いから「私の履歴書」は書けないようだが、ハッキリしているのは、彼もエリート（貴族）ではなく、労働者階級出身の男だったということ。そんな男がどのように建築を勉強したのかは知らないが、パンフレットにある杉原賢彦氏（映画批評／目白大学メディア学科准教授）のEssay「ギュスターヴ・エッフェル その人と仕事」によれば、エッフェルの名のもとに建造された主な建築物は、①ボルドー橋（1858－60）、②ブダペスト西駅（1875／ハンガリー）、③マリア・ピア橋（1875／ポルトガル）、④ガラビ橋（1884）、⑤ボン・マルシェ（1887）があるらしい。そんな彼の建築の本質は鉄橋の建築家、さらには鉄骨組の美学だ。本作では彼のことを「鉄の魔術師」と呼んでいるので、それに注目！

もともと、19世紀末のヨーロッパでは鋳鉄は脆すぎるので使われなくなっていたし、彼が「未来の金属」と呼ぶ鋼鉄はまだわずかしが使われていなかったそう。そんな素材である鋼鉄に目をつけて、高さ300メートルのエッフェル塔をすべて鋼鉄で作ると宣言し、それを実行した彼の先見性と実行力に注目！

■□■この“再会”に注目！再会後は仕事も恋も一途に！■□■

かつて松尾和子が歌った『再会』（60年）は、監獄にいる男性との再会を待ちわびる女性の気持ちを歌った悲しい曲だった。しかし、本作導入部のパーティーの場面で、パリ万国博のシンボルとなるモニュメント建設について熱く議論されている時、久しぶりに会った友人の記者、アントワヌ・ド・レスタック（ピエール・ドゥラドンシャン）の妻アドリエヌ・ブルジュ（エマ・マッキー）と再会したエッフェルはビックリ！

彼女は、1860年にはじめて出会った後すぐに相思相愛の仲となり、互いに結婚の決心まで固めた女性だったのだ。それが成就しなかったのは、上流階級だったアドリエヌの両親が、労働者階級であるエッフェルとの結婚を許さなかったためだ。もともと、エッ

フェルにとっては、そんなプライベートな面における失意の体験が、アメリカの“自由の女神像”の製作に協力したことで名声を上げて、“鉄の魔術師”と言われるまでに成長し、1886年の今、パリ万国博のシンボル建設に関するパーティーに加わる原動力になっていたわけだ。

建築に関するエッフェルの“持論”は、「人の役に立ち、後世に残るものでなければ！」というもの。当時珍しかった鋼鉄に目をつけた彼が次々と鉄橋を建設していたのは、その持論に沿ったものだ。そんな彼の持論によれば、「モニュメントのために莫大な費用をかけるのはムダ」というものだったから、パーティーの席で、大臣が「戦争に敗れた今、我が国に必要なのは自由の女神のようなシンボルだ」と挨拶しても彼は退屈そうだった。ところが、それに続いてアドリエヌが、「大臣と同感です。ぜひ見てみたい。野心作を」と述べると、突然エッフェルは翻意し、「ブルジョアも労働者も皆が楽しめるように、パリの真ん中に300mの塔を、すべて金属で造る！」と宣言したからすごい。

もちろん、コンクールはコンペ方式だから、すべて鉄で300mの塔を造るエッフェル案が採用されるかどうかは、これからの課題だが、そうと決まった今、エッフェルはいかにして仕事の面でも恋の面でも新たな己の目標に向かって突き進んでいくの？

■建設反対の大合唱に敗北？それとも・・・？■

大阪市の中心部を南北に走る道路“御堂筋”は今でこそ世界に誇る道路とされ、近時は全面歩行化計画も現実化しているが、1923年に大阪市長に就任した関一（せき・はじめ）が「道こそ街の動脈」だとして、幅44m、長さ約4kmの御堂筋構想をぶち上げた時は、「市長は船場の真ん中に飛行場でもつくる気か」と市民は肝をつぶしたそうだ。また、1964年に開館された、高さ131mの京都タワーは、「東寺よりも高いものは建てない」ことが不文律とされていた京都市では、歴史的景観との調和のありようが大問題となり、反対運動が起きた。旧約聖書における“バベルの塔”のお話（教訓）を持ち出すまでもなく、どこまでも天に向かって高くそびえる建物を作りたいという人間の欲求は根強い。荘厳な安土城を築いた織田信長の狙いがどこにあったかは明白だが、1889年のパリ万国博に向けて、「戦争に敗れた今、我が国に必要なのは自由の女神のようなシンボルだ」とはいえ、モニュメントとして300mの鉄塔を造ることにホントに意味があるの？そもそも建設費は一体いくらかかるの？

そんな私の心配どおり、せっかくエッフェルが心血を注いで臨んでいるエッフェル塔建設プロジェクトに対して、地元のパリ市民から反対運動が起きたから、アレレ。そのうえ、バチカンの教皇は「ノートルダム大聖堂より高いのは侮辱だ」と怒り、醜悪だと主張する芸術家たちからは連名の抗議文が送られてきたから大変だ。状況がそうなると、最初にビビるのが銀行。そして、資金不安が広がると、賃金不払いを心配する労働者たちからも反対の声が！第1期工事を完成するまであとわずか！ここでヘタってはすべてが水のアワに！エッフェルは、自ら建設中の塔の上に登って声を振り絞って団結を訴え、建設続行を

訴えたが、その成否は？

本作の撮影については、エッフェル塔の土台が実物大で再現されたい。一部とはいえ、CG ではないそんなホンモノの姿を確認しながら、エッフェルの力強くかつ確信に満ちたメッセージをしっかり受け止めたい。

■□■再会した人妻との恋は、運命に引き裂かれた悲恋に！？■□■

エッフェルがあのパーティーの席で、今や友人の人妻になっているアドリエヌと再会したのは全くの偶然だが、そこから回想される若き日の2人の出会いと結婚への決意は一直線！互いにあれほどの情熱を重ね合わせれば、結婚こそ親から拒否されても、アドリエヌが思わぬ妊娠でもすれば、2人のその後の人生は大きく変わっていたはずだ。しかし、その後、アドリエヌはレスタックと結婚し、エッフェルも所帯を持ち子供を設けていたから、あの時の情熱は2人だけの思い出として封印されていたらしい。

しかして、パーティーの席で思わぬ再会を果たしたアドリエヌに対して、エッフェルは再びモーションをかけていくの？それこそが本作を“史実を基に自由に作った物語”にした最大の理由だから、自由な発想と自由な想像力を働かせて、エッフェルとアドリエヌとの不倫の恋の行方を展望したい。もっとも、本作の原題は、『エッフェル』だから、エッフェル塔建設秘話がメインで、2人の恋物語はサブのはず。『エッフェル塔 創造者の愛』という邦題もそんなような意図で付けられたはずだ。さらに、パンフレットにある本作のストーリー紹介の見出しは、「＜エッフェル塔＞だけが見ていた、運命に引き裂かれた恋の結末。」とされているので、その悲恋物語の展開はあなた自身の目でしっかりと。

2023（令和5）年3月24日記